

タイトル… 汐製菓会社の新作のマカロン

## シーン… 汐製菓オフィス

(汐製菓の広々としたオフィス。デスクには奇抜なアイデアを考えている汐。塩田は資料を片手に、緊張した面持ち。)

汐… (突然立ち上がり、拳を天に突き上げる)「そうだ！マカロンだ！」

塩田… (驚いてペンを落とす)「マカロンですか？社長、急にどうしたんですか？」

汐… (自信たっぷり)「世界は甘さに飽きているんだよ、塩田！新しい革命的な味が必要なんだ！」

塩田…「新しい味…:と…:と？」

汐… (目を輝かせ)「鮪だ。」

塩田…（絶句）「まぐ、ろ…ですか？」

汐…（胸を張って）「そう！鮪だ。海の恵みとフランスの伝統菓子が一つになったら、どうなるか考えてみる！これは革新だ！」

塩田…（困惑）「ま、マカロンって基本的に甘いものでは…？」

汐…「その発想がダメなんだよ！我々は常識を超えなきゃいけない！海の幸とマカロンの甘さが融合したら、どうだ？口の中で海が広がるぞ！」

塩田…（内心で）「海の広がり方が問題ですね…」

（声に出して）「でも…国内外のお客様の反応が心配です。特に海外は…」

汐…「むしろ、海外こそ狙い目だ！日本の鮪は世界で愛されてるだろ？寿司にするなら、なぜマカロンにしない！」

## シーン2：試作室

(開発室で、スタッフがマカロンを試作している。汐と塩田が見守る中、作業が進む。)

スタッフA:(不安そうに)「社長、本当にこれでいいんですか？ 鮭味のマカロンなんて、考えたこともありませんが…」

汐:「だからこそ、今なんだよ！ 冒険がなければ、新しい地平は開けない！ さあ、早く鮭を混ぜてみる！」

(スタッフがピンク色のマカロンを試作。鮭を加えたフィリングを挟んだマカロンは、見た目は普通だが、魚の匂いが漂い始める。)

塩田:(鼻を押さえながら)「すごい匂いですね…」

汐…（自信満々に）「これだ！この香りが我々のブランドになる！」

（スタッフたちが試作品を運んでくる。）

スタッフA…「さ、社長、試食をお願いします。」

汐…（満面の笑みで）「さあ、塩田、これを食べてみる！未来の味だ！」

塩田…（顔をしかめながら）「で、でも、私は…お客様が先に…」

汐…「君が一番のお客様だ、塩田。さあ、どうだ？！」

（塩田、震える手でマカロンを口に運び、一口食べる。）

塩田…（思わず吐きそうになりながら）「うっ

…海の味が…広がってますね…」

汐…(大喜びで)「そうだろう！これは新時代のお菓子だ！さあ、試作品をどんどん作るんだ！これを持って、全国のバイヤーたちに売り込むぞ！」

---

### シーン3：全国バイヤー会議

(大手スーパーチェーンのバイヤーたちが集まる会議室。汐が壇上で自信満々に新商品を発表。)

汐：「皆さん、お待たせしました！こちらが我が社の新作、『マカロン♪鮭味』です！」

(会場は静まり返る。バイヤーたちは一斉に目を見開く。)

バイヤーA：「ま、まさか、鮭って、あの魚の…？」

バイヤーB：「ほんとうに鮭なのか…？」

汐…(誇らしげに)「その通り！フランスの伝統菓子と日本の誇る鮭の融合です。これぞ世界が求める味です！」

(バイヤーたちは疑心暗鬼ながらも試食を開始する。表情が次第に曇り始め、ぞわめきが広がる。)

バイヤーC:「う、うーん…これは…何とも言えない味だな…」

バイヤーD:「海と砂糖が喧嘩している感じが…」

塩田…(困惑しながら)「社長…もしかして、少し早すぎたんじゃ…?」

汐:「バイヤーたちは最初は驚くだろう。しかし、すぐにその真価がわかる！これからだ、これからだよ！」

## シーン④：国際展開計画

（数日後、汐と塩田が会議室で次の戦略を練っている。今度は海外市場を狙うことに。）

汐：「塩田、国内での反応は予想通りだが、次は海外だ。鮪は国際的に有名な食材だ。フランス、アメリカ、アジアでもいける！」

塩田：「そ、そうですね…でも、外国人が魚とマカロンの組み合わせを受け入れるかどうか…」

汐：「よし、さっそくフランスに売り込むぞ！パリの美食家たちなら、この革新を理解してくれるはずだ！」

---

## シーン⑤：パリの展示会

( ) パリの高級菓子展示会。世界中の有名パティシエやバイヤーが集まる中、汐製菓のブースも並んでいる。フランス語が飛び交う。( )

汐：「さあ、世界の食の都、パリでの勝負だ！  
いけるぞー！」

( ) フランス人バイヤーが近づいてくる。( )

フランス人バイヤー：「Excusez-moi(エキスキューズモワ)、これは…魚の味がするマカロンですか？」

汐：「Ouni(ウイ!) 鮭の味ですよ、日本の伝統をフランスのスイーツに加えました！」

フランス人バイヤー：「えええ…C'est

incroyable!(センクロワール)なんてアイデアだ！」

塩田：( ) フランス語が分からない様子で「えっと…いい反応なんですか…?」

汐：「多分驚いてるだけだ。さあ、試食だ！」

(フランス人バイヤーが鮭マカロンを一口食べる。表情が硬直する。)

フランス人バイヤー：「C'est... très...

particulier... (セ... トレ... パルティキュリエール...)」

塩田：「なんて言ってるんですか？」

汐：「きつと絶賛してるんだ。『特別』って言うてるだろう？つまり、我々の新作が一番だつてことだ！」

---

## シーンの：アメリカ進出

(次はニューヨークでの展示会。アメリカ人バイヤーたちが集まる。汐は自信満々でブースを構える。)

アメリカ人バイヤー：「Yo! What's this?

(ヨー!これは何だ?)」

汐：「This is Tuna Macaroni(これは鮪マカロニですー)」

アメリカ人バイヤー：「Tuna...Macaron?(ツナ  
…マカロニ?)」

汐：「Yes! Tuna, the fish! It's a  
combination of the ocean, s finest and  
France, s sweet heritage. (そりですー! 鮪、  
魚ですよ! 海の恵みとフランスの甘い伝統の  
融合ですー)」

アメリカ人バイヤー：(目を細めてマカロニを  
見つめる)「Are you serious?(本気です  
か?)」

塩田：(後ろで冷や汗をかきながら)「社長、  
これはさすがに…」

汐：「Relax, they just don't know they love it yet. (大丈夫だ、彼らはまだこの味を愛することに気づいていないだけだ!)」

(アメリカ人バイヤーが疑いの目でマカロンを手に取り、口に運ぶ。彼の表情が瞬時に硬直するが、飲み込んだ。)

アメリカ人バイヤー：「Well...that, s...

something. Never had anything like it before. (うーん...これは...すごいな。君なの初めてだ。)」

汐：(胸を張って)「Exactly! That's the future! (その通り!これが未来の味なんだ!)」

アメリカ人バイヤー：「Well, it's definitely unique, but I'm not sure if people here are ready for fish in their macarons. (確かにユニークだけど、こっちの人々が魚を入れたマカロンを受け入れるかどうかは...)」

塩田：（心の中で）「私もまだ受け入れてません…」

汐：「Don't worry, soon they'll be lining up around the block!（心配するな、すぐ行列ができるさー）」

---

## シーン7：日本に戻って

（汐と塩田が日本に戻り、オフィスで次の展開を考えている。）

塩田：「社長…パリでもニューヨークでも、反応は微妙でしたね。やっぱり、マカロンと魚は相性が…」

汐：「わかってないな、塩田！革新的なアイデアは最初は受け入れられないものなんだ。だが、いつか世界は鮪マカロンを求めるようになるさー！」

塩田：「それは…いつの日のことでしょうか？」

汐：（笑顔で）「すぐだよ、すぐに。だが、次のステップに移ろう！今度は国際的なアプローチをもっと強化するんだ。」

塩田：「もっと…国際的ですか？」

汐：「そうだ、次は『マカロン国際フェスティバル』に出展するんだ！」

---

## シーン8：マカロン国際フェスティバル

（日本で開催されるマカロン国際フェスティバル。世界中の有名パティシエや菓子メーカーが参加している会場で、汐製菓も出展している。）

司会者：「Ladies and gentlemen, welcome to the 10th Annual Macaron International

Festival!(皆様、第10回マカロン国際フェスティバルへようこそ!)」

(観客たちがフクフクしながら各ブースを回り、色とりどりのマカロンを楽しんでいる。)

塩田:「本当にこれで大丈夫なんでしょうか? 周りのブースは全部、普通の甘いマカロンですよ?」

汐:「それこそがチャンスだ! 甘いだけじゃ人の心を動かせない。鮪マカロンこそ、このフェスティバルの目玉になるはずだ!」

(観客の一人、アジア系の観光客が汐製菓のブースにやって来る。)

観客A:「これは…魚の匂いがしますね。鮪ですか?」

汐:「その通り! 日本の海から新しい味覚を世界に届けます!」

観客 A：（笑顔で）「私は試してみます！面  
白い味かもしれません。」

（観客 A が試食をし、一瞬、驚いた表情を見  
せるが、すぐにはじりりと微笑む。）

観客 A：「意外に美味しいですね！思ったよ  
りも悪くないです！」

塩田：「えっ！？好評ですか？」

観客 A：「日本人は慣れてる味かもしれません  
んが、これをアレンジすれば海外でも受けるか  
もしれませんよ。」

汐：「そうだろう！そうだろう！これが未来  
の味なんだ！」

---

シーン 6：海外メディアの反応

(翌日、海外メディアがマカロンのプレスディバイル  
を取材。汐製菓の鯖マカロンの取り上げられ  
ぬ。)

アメリカのリポーター：「And now, here, s  
something really unique from Japan:  
tuna-flavored macarons! (さて、次は日本か  
ら本当にユニークな商品です：鯖味のマカロ  
ン。)」

(リポーターが試食し、顔をしかめぬ。)  
アメリカのリポーター：「Well, it, s  
definitely... an acquired taste. (うーん、)」  
れは…好みに分かれる味ですね。)」

(フランスのリポーターも試食。)  
フランスのリポーター：「C'est... vraiment...  
spécial. (これは…本当に…特別な味で  
す。)」

(一方で、アジアのリポーターは好意的な反応を見せる。)

アジアのリポーター：「日本の伝統とフランスの技術のユニークな融合！新しい味覚体験としては面白いですね。」

---

## シーン10：結末

(汐製菓のオフィスに戻り、結果報告を受ける汐と塩田。)

担当者：「社長、フェスティバルでの売り上げですが…」

汐：「どうだ？ついに世界が我々の味を認めたか？」

担当者：「残念ながら、ほとんどの国では売りがゼロでした…ただ、アジア圏では少し反響がありました。」

塩田：「やっぱり難しかったですね…」

汐：「いやいや、それでいいんだ。始まりはいつも少ない。だが、一度火がつけば、世界中が鮭マカロンを求めるようになる！」

塩田：「それは…かなりの忍耐が必要ですね…」

汐：「次はもっと改良して、世界中の味覚を刺激するぞ！さあ、次のプロジェクトだ！」

塩田：「次は、もう少し普通のお菓子にしてくれると助かります…」

汐：「普通？そんなことじゃ世界を驚かせられない！次は、ウニ味だ！」

塩田：「また魚ですか！？もう驚かせたくないです…」

---

## エンディング